
横風に攫われて

屋根裏印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

横風に攫われて

【Nコード】

N8113V

【作者名】

屋根裏印

【あらすじ】

昏睡状態に陥った主人公のその後

俺は死まない・・・多分

いやゝ参った。

どうも俺は今、客観的に診ると死にかけてるみたいだ。
体がちつとも動きやしない。目蓋すら動かないんだ。

その癖意識はやたらはつきりしていて、病院にいるのも、家族に
囲まれてるのも、時々友達がやってくるのも良く分かる。

俺はベッドに横たわり明日をも知れぬ『昏睡状態』って奴らしいの
だけれど、どうも本人がピンと来ていない。

まあ確かに動けないし見えないけれど、音や声は聞こえるし、薬の
臭いも分かる。針を刺されたり絆創膏を引っぺがされると痛いから
そつとやってくれよと思う。

自分がそんな羽目になるなんて、あんまり考えたことはなかった
けれど、なってみるとこれが案外冷静なんだ。

死が迫って来る恐怖とかなんとかを全然感じない。いや、死ぬなん
て気がまったくしないんだよ。

夢の話

どうやら時間は今お昼過ぎのようだ、外から見ると眠ったままのように見えるかもしれないけれど、実際のところはそうでもなくて、聞き耳を立てている時もあればぐっすり眠っている時もある。

夢だってしょっちゅう見ている。

暗い川原で子供が石を積んでる事もあるけど、向こう岸から爺ちゃんが帰れて言ってる時もあるけど、そんな夢みたいな夢ばかりじゃなくて、現実的な夢ってのもおかしいけれど、さっきまで見ていた夢なんて仲間達と泳ぎに行って焼きそば食べていた。

お袋が話しかけてくれるのを聞いたり、看護師さんの会話に耳をそばだてたり、今日は誰が見舞いに来てくれるのかを待っているのもいいけど、それだけじゃやっぱり間が持たないと思う。

夢のおかげで精神崩壊しなくてすんでいるんだろなあ。

夢の中ではしっかりものを見ることも出来るし、食べたものの味だって分かる。

みんなに伝えることは出来ないけれど、俺の中では自然な感じで時間が流れている。

そう言えば確かに元気に生活していた頃にはこんなに夢をみることはなかった。

魔法の水

俺がこの状態になって一週間位経ったのか・・・

周りの会話から察するに、まだそんなに時間は経っていないらしい。それに昏睡状態だけじゃなくて何箇所か骨折もしているようだ。

子供の頃から運動が得意だったし、中高はラグビー、大学ではプロレス同好会で鍛えてるから体力には自信がある。怪我にも強いし人一倍の回復力を持つてるつもりだ。

まさか昏睡状態の男がこんなことを考えてるなんて誰も思わないよな。

ベッドで寝たきりで、骨折箇所を固定されてる人間にそんなこと出来ないだろうけど、やかんに入った魔法の水をかけてくれたら即効で目が覚めそうな気がするんだけどなあ。

今はかなり気分も良くて、すぐにでも起き上がっていつもの生活に戻れそうな気分にいるけれど、骨がくつつくまでは焦っても仕方がない。それまでに目が覚めるよう頑張ってみよう。

親父登場

なんだか病室が騒がしいと思ったら、親父が来たようだ。

お袋から知らせを受けて帰国したのだろう。俺に向かつて馬鹿だのドジだの言つてやがる。心配かけた手前仕方ないけどちょっとくらい反論したいぞ。

そもそもこの親父は商社マンで俺が高校2年のときに単身赴任で渡米したんだけど、大学卒業間際に脱サラして自分で会社立ち上げたからちよつと手伝えつて事で、アメリカに呼びつけやがった。それから3年こき使われた。幸いなことに仕事は順調で良い生活はさせてもらつたけど・・・

大学卒業を控えて、いつも顔を出してたプロレス団体からウチへ来ないかって話してもらつてたから、俺もいよいよプロのプロレスラーかなんて思つてた矢先の後ろ髪引かれながらの渡米だったけれど、それなりに充実した時間を過ごせた。

子供の頃から親父と二人で何かするのは面白くて好きだったからなあ。

考えてみると、高校時代のラグビーもそれなりに勝ち上がってこれからつて時に、同校生徒の不祥事つて奴で行き場なくしてた頃にプロレスと出会った訳だし、そのラグビーだって小学校の時にやつてた空手を中学になつても続ける氣でいたんだけど、たまたま担任の先生がラグビー部の顧問で巧く乗せられてしまったって感じた。

転機になるとなぜか風が吹くんだ。残念なことにそれが追い風だったことがない。でも結果的に向かい風でもないんだけれど。

白黒の夢

対角のコーナーに俺より二回りくらい小さいおっさんがいる。このおっさんとこれから試合をするようだ。腹はポコツと出てるが体はたるんでいない。間違いなくしつかり鍛えたレスラーだ。

ニュートラルコーナーにはレフェリーがいる。どう見ても爺さんとしか言いようがない。動きがやたらゆったりしているが大丈夫なんだろうか？俺の知っているプロレスのレフェリーってのは、フットワークと体のキレは選手以上で、試合の流れを妨げないもんだつたはずなんだが。

日系人なのか中国人なのかよく分からないとぼけた雰囲気の爺さんだが、チラツと合った眼がかなり怖くて只者ではなさそうだ。

その爺さんの合図でゴングが鳴って試合が始まった。

まずはロックアップ、お互いどの程度の力があるのか小手調べだ。このおっさん腕力はそこそただけど下半身がかなり安定してる。力だけならかなりこちらにアドバンテージがありそうだ。少し力比べをした後でロープに振ってみた。

わりときびきびした動きで戻ってショルダータックルにきた。これは十分持ち堪えられる衝撃。

効いてないのが観客にも分かるように、胸についた埃を掃う仕草をしようとした瞬間景色が流れた。

切れ味抜群の巻き投げだった。余計な動作がまったく無いから見事に投げられてしまった。

そのままアームロックで締め上げられたが、じわじわ移動してロープブレイク。

選手二人ともキビキビ動いているはずなのに、試合の流れはもっ

さりしている。

どうもこの展開は気に食わないが、どうやら試合のリズムはレフェリーの爺さんが仕切ってるようだ。

ヘッドロックからグラウンドに持ち込んでチンロック。首を捻ってやったらこのおっさん、なんと自分から俺の腕に自分の喉を滑り込ませてレフェリーにチョークだとアピールしやがる。気を取り直してもう一度締め上げても同じ技(?)で抜け出された。

それならこっちはこの手があると首四の字で締め上げてやったら、体を回してうつ伏せになりやがった。足四の字じゃないから裏返されても俺は痛くないぞ。

と、思ってたらあっさりタップしたんで放してやった。そしたら何事も無かったかのように攻め込んでくる。

レフェリーに見えないところでタップしやがったようだ。

テクニックよりインサイドワークの達者なおっさんでかなりやりにくい。

もっさり試合してたら尻餅をついた状態で背後を取られ、首の後ろに腰掛ける要領で固定されて右の足首掴んで引き上げられた。滅茶苦茶痛い。実況席でアナウンサーが足取り首固めと絶叫してる。

しかしここで俺の学習能力が火を噴いた。レフェリーが見てないところでタップ作戦である。何とか逃れることが出来た。

ここから反撃開始だ。ラリアットで吹っ飛ばして流れを引き戻す予定がおっさん場外に飛び出しやがった。追いかけて連れ戻すつもりが揉み合いになった。コーナーポストに叩きつけてやったら自分から頭ぶつけて流血してやがる。

リングに戻るとハアハア肩で息しながら向かってくるので、カウンターのビッグブーツ。

いよいよフィニッシュだ。まずはブレンバスターにいくつもりだったのに、なぜかジャイアントスイングしてる。そしてロープに飛んでボディプレス。俺こんな技使ったこと無いぞ。不思議な力に操られていたような気がするけれど、それでも何とか試合には勝てたから結果オーライだ。

堂々と勝ち名乗りをしてリングを降りようとしたら1本目は俺の勝ちって・・・

3本勝負なのか？しかも45分の？

二本目

経験したことの無い試合形式に戸惑う間もなく二本目開始のゴン
グが鳴った。

額からの出血が止まらないおっさんは手ぬぐいを包帯代わりに頭に
巻いてまだ肩で息をしてやがる。

ここはもう行くしかない。一本目を選択して勢いはこっちにある。
一気に攻め込んでとっとと終わらせよう。

ロープに振って戻ってくるところにカウンターでスピアーに行こ
うとしたら、その上を跳び越されて丸め込まれた。

芸術的なローリングクラッチホールドだった。後方へ転がされてマ
ットに肩が付いた時、おっさんのふくらはぎはもう俺の両肩を押さ
え込んでいた。

あっという間にタイに持ち込まれた。見事な三味線にしてやられた。

気を取り直して決勝の三本目、さっきまでの呼吸の乱れが嘘の様
に突進してきてドロップキック。

これがまあ、女子プロレス張りの正面跳び。男でこのタイプのドロ
ップキックやるのは、かわされるのが分かってるときに放つ藤波辰
巳くらいのもんだぞ。

胸板にヒットしたものの、お尻は跳ぶ前から数センチしか浮いてな
いし、上体は明らかに立っていたときより低い位置にある。

衝撃が小さいと感じたわりにはかなり吹っ飛ばされた。バックを取
られてまたもや足取り首固め仕掛けてきた。技のネーミングはとも
かく、痛いのは格別の技なんで二度目を喰らうのはごめんだ。

ファイヤーマンズキャリーでサイドに転がし腕殺し、クロスアーム
ブリカーに持ち込んだがロープエスケイプ。

もう一度担いで今度は高い位置からファルコンアロー。のつもりが、

体が勝手に動いてエアプレンスピン。くるくる回り始めたらずまらない。一本目もジャイアントスイングだったしカスタニョーリも真つ青な今日の俺。10回以上回した後にデッドリードライブで仕留めることが出来た。

不思議な力に操られながらも何とか勝つことが出来た。いや、もしかすると操られたから勝てたのかも知れない。

夢の辻褄

ガタガタ揺れるので目が覚めた。そう言えば病室を替わることになっていた。

状態は安定しているので集中治療室から一般病棟に移ることになっていたんだった。

ベッドに寝かされたままのお引越した。

それにしてもおかしい夢だった。元気な頃からあまり突飛な夢は見たことがなくて、俺にとって夢はわりと現実的なものだったのに、タベのプロレスはかなりいつもと違っていた。

まず対戦相手のおっさんの血が黒かったこと。黒と白と灰色しかない白黒の世界だった。それに観客の声援やリングアナウンサーのコールも無い静かな展開。そのくせゴングの音やレフェリーのコール、実況アナウンサーの声とか、聞こえてくる音だけはやけに鮮明に聞き取ることが出来た。

見たこともないような技を仕掛けられたり、産まれてから今までに経験したことがないくらいの痛みを味わったり、使ったことのない技を次々繰り出した展開も妙な気がする。

もちろん夢の中ではそれこそ夢中で戦っていたせいかもしれない気にも留めなかったことなのに、後から振り返ってみると辻褄の合わない事だらけだ。

でもはつきりと思い出せるし実体験のように体も覚えていてから、目が覚めてからの生活にその経験が活かせそうな気がしている。

そう考えると次に見る夢が楽しみになってきた。

十字架固め

今日もまたおっさんレスラーと試合のようだ。この前と比べて大物感のある選手で、背丈は俺より小さいが体重では向こうのほうが上のような。

天然パーマかどうかは知らないが、やけに黒い髪でにやけた面してこちらを睨んでやがる。

このおっさん、強そうだけど覇気はあんまり感じない。おそらくほとんど練習してないんだろう。体はこついが張りも無いし、若い頃の貯金だけで今もやってる感じだな。

見るからに体が重そうだし、この前のおっさんよりは戦いやすそうだ。

なめてかかってたのが失敗で、あっという間に倒されて腕を極められた。見掛けによらず動けるようだ。リバースアームブリーカーからアームシザース、キーロックと腕狙いで攻められた。時折「ほっ」とか「はっ」とか声を出しながらテンポ良く攻めてくる。力は強いし重いし、防戦一方のなかなかしんどい戦いだ。

なんとかヘッドシザースで切り返して少し息を整え、距離を置いてスタンドの展開に持込んだ。

そしたらドロップキックが飛んで来た。この体で跳んで来るなんて凄い身体能力だ。ちゃんと節制してたらとんでもない選手なんだろう。

しかしドロップキック一発で負けるわけにはいかない。もう一発狙ってきたのをかわしてエルボードロップ！

引きずり起こして波乗り固め。背後に回り両手首を取って背骨を足

で押さえて絞り上げる中にサーフィンの要素は無いと思うが。・・・

この辺りからおっさんのスタミナが切れ始めたのが手に取るように分かった。こんな技知らなかったが十字架固めでフォールに行く、何とか返してくるものの「いてて、いてて」と泣きが入る。

初めて使った技だけど、動きを封じてるだけでいったいどこが痛いのかよく分からない。

また自分の意思に関係なく試合が動き始めたようだ。

試合を決めにかかった俺は自らロープに飛んでスパア。いや両手は自分の体の前に畳込んでいるからショルダータックルだな。そしてドロップキック。ふらふらと立ち上がってきたところにコブラツイスト。首に両手を回すタイプではなく腕を絞り上げるタイプであつという間のギブアップ。

今回は一本勝負なのを確認してからガッツポーズだ。

成り行き任せの展開にも慣れてきたし、この前より試合時間も短くて流れが緩やかだったから消耗も少ない。

年間250試合はやれそうだぞ。

経験値

連日のプロレスの夢は何かを暗示しているのだろうか？

見たこともない選手と対戦し、知らない技を使って試合に勝つ。

朝目覚めて、その日の夜にでも試合があれば「お告げ」で勝つことが出来るんだろうか。

自分の中で何かが形成されつつあるような気がするし、この調子で戦い続ければ俺はかなり強くなりそうだ。間違いなく経験値だけはうなぎ登りである。

この経験値はプロレス以外の生活でも役に立ちそう。

もう少しこのまま目覚めることなく経験値稼ぐのも悪くないように思えてきた。

自分の意思でやりたいことをやれないのは残念だけど、知らない世界を体験する事で吸収出来るものが多くて面白くて仕方が無い。どうやら病み付きになってしまったようだ。

墓堀人

今日も俺はリングの上にいる。しかしいつもと違って相手がまだ姿を見せていない。

会場の雰囲気もここまで二戦と違って、かなり大きくしかも熱気に包まれている。

何かしらとてつもない対戦相手が現れそうな予感で花道を睨みつけていると奴が現れた。

耳を劈く大音量の鐘の音と共に現れたかと思うと、天井から雷が轟き指先から放たれた稲妻に貫かれた俺は何も出来ないうちにリングに倒れ、棺桶に押し込められて会場を後にすることになった。

真つ暗な世界がいまだに続いている。

戦うことさえ叶わず、暗く狭い場所で時間だけが流れて行く。

小刻みに揺れ続けているのは棺桶に入ったまま移動しているせいか。何処に向かっているのか知る由も無いが、辿り着く場所があるとしてそこには光があるのだろうか？

光も音も感じる事が出来ないままにどれくらいの時間が経過したのだろう。

時折止まりながらも小刻みな揺れは終わることなく続いている。

意識が薄れ始めた・・・

デジャヴ

ガタガタ揺れるので目が覚めた。そう言えば病室を替わることになっただ。

この既視感は何だろう。時間の流れが逆戻りして繰り返し始めたかのような。

さっきまで見ていた夢の中で気を失う自分がいて、目覚めると現実世界では時間が遡っている。

薄気味悪さを感じながらも周囲の音を観察していると、新しい部屋に落ち着いてからの出来事は少し前回とは趣を異にする様だ。このまま普通に時間が流れて欲しいものだ。

夢の中で俺に稲妻を放った男には見覚えがあった。それまでの夢の登場人物には全く見覚えが無かったし、何がなんだか分からないうちに始まって終わる夢だった。

しかし奴は俺が最もあこがれていた選手で頑張って練習していた頃目標にし、いつかは戦ってみたい思い焦がれていた選手だった。強く念じれば夢は叶うと言うのなら、是非ともあの夢の続きを見てみたい。

夢の中にいる俺は現実世界の俺の存在を知らないけれど、現実世界の俺は夢の中の俺のやっтерることを把握している。

残念ながらアドバイスをしてやることは出来ないが、夢の続きが始まった時のために作戦を考えておこう。中身は同じ俺のはずなんだから。

荒野

ふと意識が戻った。俺はまだ棺桶の中にいるようだ。あちこち痛むが体はどうにか動く。

腕を伸ばすと何かに触れた。少し力をこめて押してみると棺桶の蓋が静かに開き、乾いた空気と光が差し込んできた。ゆっくりと上体を起こし外の様子を窺がってみる。

空は見えるが回りは土に囲まれている。墓穴の中にいるようだ。長居する理由のないところだ。一先ずここを出て外の様子を見てみよう。

そんなに深い穴ではないから、身を乗り出し外に出るのはたやすい事だった。

そこは墓地ではなく、荒野を映像化したらこうなるといふような荒野だった。

まったく人気のない場所にポツンと穴が掘ってある。そしてその中に今まで俺が入っていた棺桶が置かれていた。

見渡す限りどの方向も地平線でどちらに向かってに進めば良いのか見当もつかない。

何かヒントは無いかと暫く考えていると、かすかに音が聞こえてきた。

少しずつ音は大きくなりそれがエンジン音だとはつきり分かるまでそれほど時間はかからなかった。

スピードは知るすべも無いが、かなりブン回しているバイクの音だ。純正ではないマフラーを装着したハーレーがこっちに向かって走ってくるようだ。

舗装された道がそばを通っているのだろうか？

夢の続き

夢の続きを見ていたようだ。しかしその夢も中途半端なまま目が覚めてしまった。

一夜完結の夢が続いていたのに途切れてしまった。次に眠りについた時には続きのシーンを見ることができののだろうか。

意識が覚醒するにつれ、担当医と看護師の会話が聞き取れるようになってきた。

俺の脳波が不自然な動きをしているらしい。

人間は眠っている時レム睡眠とノンレム睡眠を繰り返すものだが、ここ数日俺の脳波はレム睡眠の時間が異様に長く、ノンレム睡眠の時間がほんのわずかしから見られないって事らしい。

さらにベータ波が脳内の各部位で活発に検知されるのが説明できないようだ。

脳波から判断するとかかなりの時間俺は「起きて」「いることになるらしい。

それはそうだろう。俺はずっと眠っているわけではなく、目覚めている時は色んな事を考えているし視覚と味覚以外はフル活動で情報収集しているのだから。

しかも夢の中では見る事も味わう事も動き回って汗をかくことすらしている。

日々生活してる気にいるんだ。

獲物

バイクの排気音が徐々に大きくなるにつれ、圧縮された空気が逃げ場を失ったかのように風が吹き始めた。

風の音と共鳴する大音響はもうすぐそこまで来ている。

音量の変化とともに、舗装路から逸れたバイクは時折後輪を空転させ、跳ね上がった回転数が新しいアクセントを与えるようになった。

低いサドルに長いフォーク必要以上に太い後輪のホットロッドはエンジンも含めて漆黒のマシンだった。

ライダーは大男で優に2メートルを超す体軀はタトゥーで埋め尽くされている。

すぐそこで止まったバイクから降りてこちらに向かつて歩いて来る男は、視界に入ってから一度も俺から視線をはずしていない。まるで俺は奴の獲物のようだ。

逃げようとしても確実にまた捕獲されるのだろう。それならば当たって砕けるだ。向こうの出方次第では窮鼠にでも何にでもなつてやる。

指先から稲妻を放たれたら勝ち目は無いが、その前に少しくらいは言葉を交わせるのだろうか。展開を予想することすら出来ずに立ち尽くすしかなかった。

ほんの数秒の事のはずなのに、こちらに向かつてくる奴の足取りがあまりにもゆったりしていて、いつまで経っても終わらない。

こちらに向かつて延々と重く歩を進めて来る。

時間の流れが濃密になってしまったのか。

いや、時間だけではなく空気までもが濃密になり重くのしかかって

22

走馬灯

強い向かい風と巻き上げられた砂埃を道連れに、こちらに近づいてくるライダーの重い足取りを薄く開けた眼で追っていた。

大気に締め付けられるような思いで身動きもせず、奴が目の前に立つのを待った。

黒いタンクトップから腫上がった様な肩と丸太のような上腕が垂れ下がっている。

喉元にまで彫られたタトゥーで素肌の色がよく分からない位だ。

ようやく対峙した大男が風を遮ってくれたので、目蓋を開いてその顔を拝んでやろうとした。

濃いサングラスのせいで眼を見ることは出来ないが口元はほんのわずかに不敵な笑みを浮かべている。

俺も身長はある方だが、それでもかなり見上げないと視線が絡むことは無い。

例の墓堀人と同一人物なのか。

ならば俺に勝ち目は無いぞ。

どうする？

さあどうするんだ？

死に直面した時に人は走馬灯のように過去を思い出し数多の時間が一瞬にして流れると言う。

ならば、今の俺は死に直面しているのだろうか。

時間は流れることをやめてしまったにもかかわらず、思考回路がショートしたかのように頭の中で何かがスパークし独楽鼠のように走り回っていやがる。

恐怖もあるが、切羽詰ったこの状況を少しばかり楽しんでもある。

どんな答えが出るんだ？

チヨークスラム

何気なく奴の右腕が動いたかと思うと次の瞬間俺の喉元に向けて伸びてきた。

とっさにその手首を両手で掴んだが重力など無いかのようにふわりと体が浮き、さっきまで見上げていた奴の顔を見下ろすことになった。

しかしそこに視線は無く、それはついさっき這い上がってきたばかりの墓穴に注がれていた。

またあそこに投げ込まれるのかと思った次の瞬間、もう俺の体は投げ捨てられ落下を始めていた。

しかし、ほんの数メートルで到達するはずの墓穴の底ではないどこかに向かっているかのようにいつまでも落下が続く。体が感じるスピード感からするとかなり深い穴を落下しているように思える。

果てし無く深い奈落の底を想像し始めた時に背中に衝撃が走った。

俺の背中を受け止めたのは穴から出るときに足場にしていた棺桶の蓋だった。

あれだけ長く感じた落下の時間は何だったのだろうか。

さっきから時間の流れ方がおかしくなっている。

ほんの数秒間の出来事を何分にも感じてしまうことが何度かあった。

不思議な感覚に浸っている暇は無い。土が降って来たからだ。埋めようとしていやがる。

もう一度棺桶の蓋を足場に外へ出ようとした。

目の前にシャベルが振り下ろされたのでそれを掴んで引き寄せた。

奴は不意を衝かれて体勢を崩した。

その隙に穴から這い出た俺はバイクに向かって必死で走った。

やはりそうだった。

時間の流れ方はやはりおかしかった。

世の中と俺との時間がシンクロしていない。

タイタン

走りながら後ろを振り返って見た。

そこではまだ奴が体勢を崩したままで、まるでコメディアンがジャイアント馬場の物まねをしているようにゆっくりと膝を地面につけようとしている。

これなら軽く逃げ切れそうだ。

奴の乗ってきたバイクに辿り着くと、案の定キーは刺さったままだった。

こうなればこっちのモンだ。速攻でエンジンをかけてギヤをローに入れてアクセル捻った。

すごいトルクだ。こんなんでよく舗装してないところを走って来たもんだ。まっすぐ走りやしない。

どんなカスタムしてやがるんだ。こんなのカスタムじゃなくてチューンだぞ。

こりゃハーレーじゃないな。タイタンだわ。

何とか舗装路に出てアクセル全開。ちょっと落ち着いた気分がタイタンを楽しませて貰おう。

舗装路をまっすぐ走るんならこんな気持ちの良い乗り物は無い。

このまま何処までこいつに乗って逃げようか。とっ捕まったらタダじゃ済まないのは十分理解できる。

しかし今こうしてるのだからかなり理不尽な話だ。

走りながら考える余裕が少し出来た。追い風が吹いているかんじだなあ。

しかし理に適わないことが多い。

墓穴から這い出てバイクの音を耳にしてから奴と対峙するまでは凄まじく時間がかかった。

喉元をつかまれ墓穴に投げ込まれるまでは瞬きする間も無かった。再び墓穴から出てバイクを走らせるまで、世界は凍りついたかのようにならなかつたままのようだった。

それに何より指先から稲妻が出てそれにやられたこと自体がおかし過ぎる。

トンネル

トンネルに入った。長いトンネルだ。

かなりの時間走っているような気がする。いったいどれだけ長いんだ。

毎時80マイルでもうかなりの時間走っている。

また時間の流れがおかしくなっているに違いない。

それ以前にこんなところでトンネルに出くわしたことがそもそもおかしい。

さっきまでどっちを見ても地平線しか見えない平原だったところに、大雑把にアスファルトで一筆書きしたような道がひよるひよるあっただけなのになんだ。

まるで地下にでも潜ってしまったかのようなうた。

追われている恐怖も少し手伝ってアクセルをひねる手首の力が弱まることは無いが、どちらかと言うと、前にペースの速い奴がいてそれを追いかけている方が簡単にアドレナリンが作用してくれるんだがなあ。

しかし走らなきゃならないって使命感があるから眠くならないのが救いだわ。

前後にも対抗にも何もいない道をひたすら走る。

何時まで何処まで走れば違う風景を見ることが出来るのだろうか。

出口

俺はいつからこのトンネルを走っているのだろう。

視界の左隅にセンターラインがストロボのようにチラチラしながら流れる以外何の変化も無いままだ。

いや待てよ、これはセンターラインなのか？

だだっ広い荒野とタイタンのせいで体が勝手に右側の斜線を選択したけれど、もしかしたらこのトンネルは一方通行で、追い越し車線を走っているのかもしれない。

そんなことを考えながら走っていると、バックミラーに変化の兆しがあった。

小さな白い点が上下左右に激しく動いている。

この速度だと振動でバックミラーに移る物なんかほとんど判別出来たものではない。

そして少しずつそれが大きくなってきた。

まるで人魂のようにバックミラーに映る黒い背景に形を成さない光が揺れ動いている。

その光がひとつだけなのが分かるようになった頃には、かすかに音が聞き取れるようになってきた。

少しずつではあるが確実に揺れる人魂は大きくなり、やがてトンネル内にもう一台の排気音が反響するようになった。

ロングストロークの2気筒。間違はなくアメリカ製のエンジンだ。しかしこつちだって80マイルで巡航しているのだから、背後に迫るアベレージスピードは考えにくい。

アクセルを捻り100マイルまでスピードを上げてみても、やはり少しずつ近づいてくる。

出なくは無い速度だけれど、このバイクで時速100マイルを維持するのは技術以外の何かが必要だぞ。

エンジンより先にこっちの神経が音を上げそうだし、しかしそんな心配も長くは続かなかった。

ようやくトンネルの出口が見え始めた。外から差し込むの光がモチベーションを高めてくれた。

100マイルを維持したままトンネルから出るともう、すぐそばまで後続車は来ていた。

振り切れそうにも無いから少しスピードを落として相手の出方を見ることにした。

嫌な展開

振動の収まったバックミラーで後続車を確認してみる。とそこに映っていたのはビューエルだった。

ハーレーのエンジンを積んではいるが、車体はスポーツモデルそのもので、峠に入れば日本やイタリアのそれのようなマシンだ。

1200ccの排気量にしては極端に小さいマシンから大柄なライダーがはみ出して見える。

展開的にはタイタンのライダーが追ってきたものだと思っていたが、どうもそうではないようだ。

路肩に寄せてバイクを止める。

やはり後続のバイクも並ぶように止まった。

こちらに近づいてくるのは、やはり俺を墓穴に投げ込んだ奴とは別人だった。

今度の奴も馬鹿でかくて、タトゥーこそ無いが体も分厚くむしろこちらのほうが強そうにも見える。

スキンヘッドが近づいてきた。口元には不気味な笑みが浮かんでいる。

正面に立ち俺を見下ろして「小僧、いい度胸してるじゃねえか」。

嫌な展開だ。

赤鬼

目の前に圧倒的な体格差のある相手がこちらを睨んで凄んでいる。奴にしてみれば、逃げる獲物を追いかけてようやく捕まえるその瞬間だ。

少し高揚して顔色が赤みを帯びている。
まるで赤鬼だ。

追い詰められていることは否めないが、心底怖いって訳でもない。

この局面をどう乗り切るか。

笑みで口元を歪めたまま間合いを詰めようとしていやがる。

タトウの男には遭遇した次の瞬間墓穴に投げ込まれたが、この赤鬼は少しばかり動きが緩慢なようだ。

走って逃げれば振り切れそうだ。それとも今度はビューエルで逃げるか・・・

考える時間に余裕がある。また時間の流れがおかしくなり始めているのか。

それなら苦も無く逃げ延びることが出来そうだ。

しかしいつまでも黽ごっこしていたくないしなあ。

と言って話し合いが出来そうな雰囲気でもないし。

すると赤鬼がスローモーションで音声を再生した時ように低い声で話し始めた。

「動くんじゃない」

状況は把握できているけれど、何でこうなったかの原因はさっぱ

り分からない。
「バイクは返す。傷はつけていない。帰らせてくれ。」

膠着状態

スキンヘッドの赤鬼との膠着状態が続く中、暫く凪いでいた風が思い出したかのように吹き始めた。

また今度も向かい風だ。砂埃で眼を開けていられない。

相手が替わっただけでさっきと同じシーンだ。

また逃げるしかないか。

どうやってビューエル乗り逃げしようか頭の中で作戦を練っていたらいたら、エンジン音が聞こえてきた。

今度は車の音だ。重ったるさからして少なくとも「走る」車ではなさそうだ。

徐々に近づいてくるエンジン音は、間違いなくOHVの音だ。いろんな要素がひしめき合って調子は最悪だとドロドロ唸りながらこっちに向かってくる。

姿が見えるとそれは相当古い年式のトールスワゴンだった。

この車からいったい誰が降りてくるんだ？

少なくともタトウの男のイメージじゃないぞ。

赤鬼も車の音のする方を見ようと振り返った。

隙が出来た。今だ。逃げる。

しかし次の瞬間奴の右手が俺の喉に喰い込んでいた。
またかよ。

今回はそのまま投げ捨てられることは無く、どうやら車が来るのを待つことになるようだ。

グレーなのかベージュなのかうまく色を表現できないくらい年を

食って草臥れたトーラスがようやく到着した。

重そうにドアが開き年配の男が降りてきた。

この車にしてこの親父ありってかんじのバーコード頭のでっぷりした親父だった。

ただその胸板や腕の筋肉からして運動不足で食い過ぎのデブではなさそうだ。

赤鬼とアイコンタクトを交わすところらに向かって歩き始めた。

俺は首根っこ押さえられたまま成す術も無く待つしかなかった。

ブッカー

一対一でも勝てないのに相手の方に助っ人が来るなんて。

ポンコツのワゴン車から降りてきた親父は俺の前に立つと口を開いた。

「何、勝手なことしてるんだ」あからさまに怒気を含んでいた。

しかしその貫禄からは考えられない甲高い声で、びびる気持ちが和んでしまった。

それにしても俺がいつ勝手なことをしたんだろうか。

甲高い声が速射砲のように言葉を放ち続けた。

容貌と声は一致しないが、声の高さと言葉の連打は妙に一致する。

どうやらこの親父はブッカーで、俺がそれを台無しにしたことを怒っているようだ。

長い話の要点を？い摘んでみると、俺はプロレスの試合でやられた後スキッドで荒野に埋められるが、受けたダメージを引きずりながらも復活を遂げて団体のプッシュでベルトに挑むはずだったらしい。

そんな話は初耳だし、そもそも俺はいつからこの団体の選手だったと言っんだ。

確かにタトウーも赤鬼もプロレスラーとしてトップを張っていると言われれば100%納得だ。

白黒の夢で戦ったおっさん達とはものが違う。

しかし俺は自分の位置付けがさっぱり理解出来ていなかった。

ブッカー親父の話が終わって分かったことは、ぼつと出の新人がブツク破りしたんだから、そりゃ周囲は怒るわなあ。

でも、そんな打ち合わせをした覚えが無いのだから仕方が無い。

じたばたしても仕方が無い。どうにでもしてもらおうか。
一旦事態を落ち着かせよう。

そしたらワゴンの助手席のドアが開いた。

殺気の結界

やっぱりそうだった。草臥れたワゴン車から降りてきたのはあの男だった。

こんなことになるんじゃないかと思いきや予感がしていたんだ。

赤鬼もブッカーもそちらに眼をやると緊張が走り少し背筋が伸びたように見えた。

奴の周りには殺気の結界があるかのようだ。ゆったりと歩を進めこちらに向かってくる。

赤鬼の金剛力で動きを封じられている俺は、成す術も無く結界に呑み込まれた。

目の前に巨大な男が二人こちらを見下ろして、まさに仁王立ちしている。

阿吽と言うより、赤鬼と青鬼だが・・・

固唾を呑む間も無く青鬼に腹を蹴り上げられ、つんのめったところを担ぎ上げられた。

俺の体は2メートルを軽く越える奴の頭を見下ろす高さまで浮いたかと思うと、次の瞬間地面に向かって落下が始まった。

奴の主観で言うならば、「落とす」では無く「叩き付ける」だな。

担ぎ上げられるまでの速さに比べて地面に向かうスピードが異様に遅く感じられ、すさまじい恐怖を長々と味わうことになった。

そして背中が大地に到達した瞬間、全身を激痛が駆け回った。いつまでも。気を失うことすら出来ないくらいに。

身動きも出来ない激痛が続く中、俺は大の字で地面にひしゃげたまま辛うじて動かせる眼球で三人の様子を窺った。

時折風に乗ってブツカーの甲高い声が入るが、何を言っているかまでは聞き取れない。

起きねば

話がまとまったのか、三人が俺の顔を覗き込んだ。そしてタトゥーの男が言った。

「起きろ」

少しは痛みも収まってきたし何とかしなさいといけない。とりあえずそう言ってくれてるんだし、自力で立てるかやってみよう。

関節はギシギシと軋むし、筋肉はまるで水中で全力疾走しようとしているように重ったるい。

叩きつけられた背中では他人事のように感覚が遠い。

何とか中腰になったところで、以外にも赤鬼が俺の体を支えてくれた。

ブッカーの親父が言った。

「なあいいか、これは仕事なんだ。」

「あれが嫌だこれが嫌だと駄々を捏ねるんじゃない。」

いやいや、俺は駄々を捏ねた覚えは無いぞ。

どついう経緯か知らないが、仕事を請けた記憶も無いんだ。

さっきこの親父が説明してくれたように、俺が台本無視してんでもない事になっているようだから怒っているのだろうが、じゃあ俺にどうしろって言うんだ。

少なくとも悪気は無かったことを伝えて帰らせてもらうしかない。

タトゥーが口を開いた。

「お前はこんなもんじゃないだろう」

殺気立ったオーラの向こうでその眼は意外にもかなり人間味がある光沢を含んでいる。

さっきまで悪魔のように思えた三人が、怖い先生位の位置付けまで近づいてきた様に思える。

もしかすると、さっき地面に叩き付けられたことが楔ぎだったのか？少し緊張もほぐれて話が出来そうな雰囲気だぞ。

やりなおし

ようやくこちらの事情を説明できそうな雰囲気になったみたいなので、頭の中を整理しながら話し始めた。

俺の前にいる三人は全身逆鱗だらけのようだから、言葉を選んで慎重に話さないと。

「まず・・・」

話し始めた途端にまた新展開だ。

向こうから男が一人走ってくる。今度はバイクでもなく車でもなく自分の足で走ってくる。

その姿はなんだかどこかで見たような気がする。

と思ったのもつかの間で、近づいてくるのはアメリカに住んでいた頃の友達のケビンだった。

この男、俺とは似たもの同士と言うか、背格好も似ているしバイクやプロレス等趣味も似ていて気のあう奴だったが、何でこんなところに出てくるんだらう。

息を切らしながら駆け寄ってくると「置いてけぼりは無いだろ」ブツカーの親父に言い放った。

そして、赤鬼に向かって「俺のバイクは？」

そう言やあのビューエル、ケビンのバイクだわ。

思い出したぞ。190超えた図体でそんなちっちゃいバイクに乗ってどうするんだとよくからかったものだ。

ケビンは息を切らしながら、今度はタトゥーの男に向かっていった。

「すみません、俺のダチがやかしちまったみたいで。」

「ちょっと待て」ケビンに話しかけようとしたタイミングで五人がそれぞれ何か言おうとした。またややこしくなってきた。このままじゃまとまるものもまとまらない。

タトゥーの男が少し語気を強めた「あのな」

これで誰も話せなくなった。

「いいからお前ら」「いつまでも御託並べてないで自分の仕事に戻りやがれ」

俺に向かって「小僧、てめえはこれで沈むのは勿体無い。今度はヘマすんじゃないぞ。」

ほかの連中に「やりなおしだ」

流れるに俺は赤鬼と一緒にトールスワゴンに乗り込むことになった。

また拉致られんのかよ。

ギミック

タイタンとビューエルの後を追うポンコツワゴンの中で、ここまでの本来あるべきストーリーと俺がやらかしてしまった彼らにとって想定外の出来事について詳しく話を聞いた。

本当なら墓穴に埋められた俺をケビンが助けに来ることになっていたらしい。

ケビンは若手の有望株で、団体トップのタトゥーと赤鬼のコンビに挑んでいくストーリーが進行中だそうだ。

一緒にプロレス見学した頃はインディー指向の野郎だと思っていたが、メジャー団体が成功を掴みかけているようだからめでたい話だ。

で俺がそのタッグパートナーで、大物レスラー二人と絡んで奴の見せ場をお膳立てすることになっていたらしい。

日本でプロレスラーになりそびれた男だから本場のメジャーで試合するのは悪い気はしないし、プロレスの段取りってモノも多少は理解しているつもりだが、今回のことは俺の知らないところで随分と話が進んでしまったようだ。

大半はケビンの野郎が調子こいて適当なこと言いやがったのが原因みたいだが、カワサキのモンスターに乗ったジャパニーズ・カミカゼ・ライダーのコピーはまんざらでもない。

実際機械モノはカタログスペック命な俺は、アメリカにいた頃ではZX-100Rに乗っていた。

無謀運転の限りを尽くし国外逃亡してアメリカにやってきたカミカゼ・ライダーで忍者の末裔という、日本人から見るとかなりベタなギミックだ。

これはどう考えても、明らかにケビンのアイデアだな。

で、奴はビューエルのライトニングで得意のスタント披露してアメリカン・エクストリーム・ライダーに収まっていやがる。

てめえはドイツ系なんだからBMWだろうが。

話を聞いて事情が飲み込めると、かなり面白くなってきた。

こう言っちゃ何だが選手としてはケビンより俺のほうが数段上だぞ。

ゼロ戦

短いトンネルを潜り抜け少し走ると、路肩に二台のバイクが止まっていた。

車は路肩に寄り、並ぶように停止した。

逃げているときはあんなに長く感じたのが非現実的に感じられるくらい距離だった。

状況を飲み込むために集中して話を聞いていたから時間の経過が速かったという範囲ではない。

やはり何かがおかしなことになっている。

そんなことを思いながら、車から降り少し歩くと例の穴があった。すでに二人の男はその穴の脇で俺達を待っていた。

ふと見ると少し離れた場所にもう一台バイクが置いてある。

それに気づいた瞬間、嫌な予感がした。

競馬でも何でも予想は当たらないが、悪い予感って奴はまず外れることが無い。

荒野にポツンと置いてあるバイクは緑掛かったカーキ色とでも言う様な色で、カウルのど真ん中に赤い丸がある。

こりや明らかにゼロ戦がモチーフだ。

そんなもん、俺の爺さんだって行ってないくらい昔の戦争で飛んだ戦闘機だぞ。

この国じゃ未だにこれがジャパニーズ・カミカゼなのか。

しかもZX-6Rだ。悪いバイクじゃないが俺は10Rの方がいいんだよ。

バイクに眼をやる俺を見てケビンがニヤけてやる。

この野郎、やりやがったな。

てめえのビューエルの半分の排気量しかないバイクをカタログ・スベック・マニアの俺に宛がいやがった。

しかし身に覚えが無いとはいえ散々説教喰らった直後だ。

他の三人の手前ここでまたグズるわけにもいかない。

甘んじて仕事の道具と割り切ろう。

さあ仕事だ仕事。

「ご機嫌いかが」

ぐっすり眠れたおかげなのか、やけにすっきりした目覚めだ。病室には誰もいないようで、のんびり考える時間がある。自分がこうなつてどれくらいの時間がたったのだろう。

ぼんやりしていると足音が近づいてきた。

看護師さんが来たようだ。

何の反応も無い俺に向かい「ご機嫌いかが」と声をかけてくれる。

おおこの声は、一番お気に入りの看護師さんだ。

今日は寝覚めが良いぞ。

どんな人なんだろう？

本当に眼が覚めた時には「ご機嫌いかが」と聞かれるまで眠ったふりをしておいて、「おはよう」と言って起き上がった驚かしてやるう。

勝手に好きな女優をイメージしたりして楽しんでいる。

これは夢じゃなくて妄想だな。

脈も体温も正常。

いつもと変わりなく時間だけが過ぎて行く。

忍者

冷蔵庫からビールを取り出し、ソファに沈み込んだらテレビのチャンネルをプロレスに合わせる。

月曜日の夜は外出していてもこいつが楽しみで、なるべく早めに切り上げて帰ってくるんだ。

テレビが映ると、なんだかいつもと違って様子がおかしい。

画面では顔面血だらけのレスラーが大男にいたぶられていた。

最近あまり見なかった流血シーンがいきなり眼に飛び込んできたので、ちよつと意外に思っただけで、もっと意外なことに驚かされた。

いたぶられているのはどう見てもケビンの野郎だ。

リングサイドには奴のビューエルが停めてある。

昨日も一緒に走ったバイク仲間のケビンに間違いない。

確かにいいガタイしてるしプロレスの好きな奴だけど、何でテレビで血だらけになってるんだ。

ケビンにお仕置きしている大男は高調して全身を赤く染め激しい攻撃を繰り返している。

これはもう駄目だ。どう見てもケビンに挽回の可能性は無いぞと思っただけだった。

地味な色にペイントしたバイクがエントランスに現れると一気にリングに向かった。

リングサイドにバイクを乗りつけた男は忍者の格好をしている。

ってことは、バイクはカワサキか。

なんてことを考えていた次の瞬間、驚くにも程があるくらいに驚か

された。

どう見てもこの忍者は俺だ。

忍者頭巾で顔は覆っているがどう見ても自分なんだよ。

鎖帷子の様な物を脱ぎ捨てリングに入ると大男に向かって蹴りを放った。

プロレスごっこをしている時に良く使った飛び後ろ回し蹴りってやつだ。

身に覚えの無い光景だが、俺に間違いない忍者の胸には日の丸みたいに赤くて丸い大きな痣がある。

虫の息のケビンを背に忍者は大男を蹴りまくっている。

何なんだこの放送は。

まさか自分が試合をしているプロレス中継を見ることになるなんて、しかもこの時間は生放送のはずだ。

カミカゼ・アタック

忍者袴と地下足袋を履き忍者頭巾を被った俺は、稲妻に打たれた時に胸に出来た大きな日の丸の痣を鎖帷子で隠し、ゼロ戦に跨った。リング上ではケビンと赤鬼が試合中だ。

場外乱闘でケビンが流血しリングに戻って絞め技でいたぶられ始めた俺の出番だ。

一方的な試合展開になりだしたので、セルを回しスタート。エントランスでリングの方向にバイクを向けて一旦停止、アクセルを捻り軽くウィリーさせて一直線に駆け下りた。

リングサイドにゼロ戦を止めると仁王立ちする赤鬼と真正面から対峙する。

そして一度右にフェイントを仕掛けてからの飛び後ろ回し蹴り。見栄えもするし忍者っぽいからまず初めに使う予定だった技だ。当然きれいに赤鬼の頭に命中。

その後は一気に蹴りの集中砲火で赤鬼に何もさせない時間帯。ダウンを奪いケビンの様子を窺う。
「起きろ、この野郎」

まだ呼吸も整わないが、どうにか立ち上がろうとする相棒を確認すると、赤鬼の背後に回ってフルネルソンに捕らえる。身動きできずにじたばたしている赤鬼のどてっ腹にケビンのスピア
ーだ。

こうなると形勢逆転で赤鬼を二人掛かりで痛めつける展開だ。額からの出血をもとせずにケビンが馬乗りで殴りかかる。

しかしここで暗転。

いよいよ真打の登場だ。

おどろおどろしいエントランステーマが流れ、リング上の三人は間合いを取って静止する。

照明が点くとそこには高々と抱え上げられたケビンがいた。

次の瞬間、奴の体はマットに向かって叩きつけられた。

次は俺の番だ。

しかし今度は離れた場所から稲妻で攻撃されるわけでもなさそうだし、抵抗するチャンスは十分ありそうだ。

とりあえずドロップキック。

うまく顎を捉えたぞ。

よろめいてロープにもたれたところにクローズライン。

場外に落とすと俺はコーナーポストの上から両手を大きく広げて頭からのダイビングアタックだ。

リングサイドの実況席では「カミカゼ・アタック！」とアナウンサーが絶叫している。

相手にも致命的なダメージを与えるが、自分もタダではすまない技だ。

場外で二人、リングに二人、動けないレスラーが横たわっている。

さあどうするレフェリー！

乱入

テレビでは、試合の流れが停止し、四人の男が這いつくばっている。

唯一自分の足で立っているレフェリーが思い出したかのようにカウントを取り始めた。

カウントが進みエイトまで進んだ時だった。

画面に映るダウンしたままのレスラーの姿とは裏腹に、スピーカーからは観客のざわめきが聞こえてきた。

何が起こったんだ。

カメラが切り替わると、そこにはリングに向かう金髪を長く伸ばした男と髪を短く刈り込んだゴツい男が二人映し出された。

その後ろから小柄だが肉付きの良い男が高級そうなスーツに身を包んでついて来る。

現れた男達はリングに上がると、二人掛かりで動けない大男に攻撃を加え始めた。

後から来た男は場外で最後に出てきた黒ずくめの男に攻撃を加えている。

状況の変化についていこうと画面を食い入るように見ていると、場外では忍者の俺がスーツの男の足にしがみつき、その隙に黒ずくめの男が反撃に転じた。

息を吹き返した黒ずくめの男がリングに戻り、乱入してきた二人に向かつて行った。

しかしパートナーらしき男はすでに戦闘不能だ。

多勢に無勢。押し込まれ始めた男を救ったのは、なんと忍者の俺と

ケビンだった。

上着を脱ぎ捨てリングに上がった男も含め三対三の戦いだ。レフェリーは必死で制止するが何の効果も見られない。

そんなときにまた、ひときわ大きなざわめきが起こった。

エントランスから二人の男が駆け込んでくる。

今度は白人と黒人の二人組で、進入速度の速さからしてかなり動ける選手達のようなのだ。

リングに駆け上がった二人の標的は俺とケビンだった。

すでに消耗している俺達はいいように切れの良い攻めを受けている。これでまた形勢逆転、リング上は何人も男達の乱闘で收拾がつかないでいる。

ここでCMだ。

CMが明けるとレフェリーやセキュリティが大勢出てきて選手を分け事態は收拾されつつあった。

リングが落ち着きを取り戻すとGMが登場して、それぞれ抗争中の四組のタッグチームが今度の特番でタイトルを賭けて戦うことを決定したらしい。

互いにマイクを取り罵り合うシーンで放送が終了した。

いったい何なんだこの番組は。

明らかに俺の忍者が使った蹴りは実際俺が得意な技だし、やってみると言われれば間違いなく同じことが出来ると思う。

でも俺はここにいて生放送でプロレスなんて出来るはずがない。となるとあの忍者は誰なんだ。

ロックアップ

今夜の会場はやけに暗い。テレビ中継無しのハウスショーのようだ。

こころなしかマットも硬いし、ロープの張り具合もいつもと違うぞ。見覚えのないリングアナウンサーが対戦相手の紹介をしている。

我に返ってみると俺は忍者の格好をしていない。

今夜の俺はメジャー団体の意気の良い若手ということではなさそうだ。

そこに対戦相手が登場した。

紫色のタイツとリングシューズを履いた男は三十歳前後かなあ。

少し年上のように思えるそのレスラーは、俺より背は低いが筋肉質の良い体で、特に背筋が素晴らしい。

良く見せるための筋肉ではなく戦うための筋肉だ。

悪党レスラーのようにこちらを睨みつけるわけでもなく、俺の足元に目をくれている。

試合開始のゴングが鳴った。

対戦相手には隙がまったくない。

第一印象の通りかなり強い選手に違いない。

以前に戦ったおっさんレスラー達とはかなり格が違うようだ。

低い位置からタックルを狙っているようだから、グラウンド勝負か。学生時代にかなりまじめに道場通いをしたから少しはつき合えるだろうが、関節技で勝負しちやいけない相手と見た。

相手の上体が少し起きて重心が上がったので、組み合ってみるこ

とにした。

ロックアップしてみるとその力強さに驚かされた。背筋だけでなく上腕の力や握力も凄まじい。

「こいつ、アンドレでも投げそうだ。」

次の瞬間俺の体はふわりと浮いて前方に投げ出された。

上腕の力で俺の体を引き付けて浮かせ、背筋で後方に投げる。きれいなスープレックスだ。

硬いマットはダメージを増幅する。

すぐに起き上がりたいところだったが、痛みが激しく反応が遅れてしまった。

カバーに来たのは返したものの、グラウンド・レスリングに引き込まれてしまった。

股裂きと膝固めと足首固めを一度にかけられた。

ジャベミたいな技で身動きひとつ取れないのだが、すべての関節が順関節、つまり曲がる方向に曲げられているのであまり痛くない。しかし恥ずかしい格好のまま動くことも出来ない。

たぶん後ちよつとだけ力を加えれば悲鳴を上げさせられるのは承知の上で加減しているのが分かる。

— 先ずロープに逃れ立ち上がろうとしたら膝が飛んできた。続いて肘打ちだ。

ナックルは使ってこないが、体の硬い部分で打撃を打ってくる。

しかし打撃戦になればこちらにも打つ手はある。

水面蹴りで足元をすくいエルボードロップ。

こんな動きを見たことがないのか、観客席が沸いている。

打撃戦の距離で間合いを取り睨み合った時に気がついた。
対戦相手、金髪の巻き毛でハンサムな顔立ちなのだがどうやら右眼
が義眼のようだ。

試しに左のハイキックを打ってみた。

ヒットした。これで少しは試合を組み立てられそうだ。

フッカー

蹴りで尻餅をついた対戦相手を見て間合いを詰めようとしたら、下から激しく突き上げられた。

ヨーロッパアンッパーと言う奴だ。

今度は俺が後ずさる。

打撃をまともに喰らってスイッチが入ってしまったようだ。

顔色も目つきも変わっている。

今まで感じた余裕の部分を削ぎ落として完全な戦闘モードに入りやがった。

どうやらかなり頭に血が上りやすい男だったようだ。

投げ技でスタミナを削られて、グラウンドで関節極められたらヤバいと感じていたが、興奮して打撃戦に来るならこちらにもチャンスは十分ありそうだ。

相当高いスキルの持ち主だし観客の声援からして実績もある選手のようにだが、相手の型で捕まりさえしなければ怖くない。

しかし油断をした訳ではないが次の蹴りを捕らえられ、そのままキャプチュードで後方へ投げられた。

このマットの硬さは何とかならないのか、それに投げ終わりのタイミングを微妙に後ろにずらして受身を取りにくくしてきやがった。そして引きずり起こしてダブルアーム・スープレックス。

そのまま体を捻ってのしかかりフォール。

俺に余力はなかったが、足首がロープ掛かっていて助かった。グロッキー状態の俺に待っていたのが関節地獄だ。

自分の体なのに全ての関節が相手の意のままになっている。

こりやシューターと言うよりフッカーだな。

対戦相手の興奮状態が少し落ち着いたのか、また少し嫌な余裕を感じさせ始めた。

身動きは出来ないながらもギブアップするほどの痛みも感じない。形勢は圧倒的に不利なままだが、少し呼吸を整えることが出来た。

そうか、この男、投げからの関節ではなく、関節でいたぶって投げでフィニッシュが勝利のパターンなんだ。

蛇の穴

こちらが極められて身動き出来ないながらも、試合は膠着状態だ。蛇のように相手の手足が俺の体に絡み付いてくるのを防ぐ手立てがない。

ルチャの関節技のように思っていたが、巧くてこの原理を応用して極めてくる。

硬いマットやだらだらなロープ、薄暗い証明。

そしてえげつないスープレックス。

ここはヨーロッパのリングということか。

「蛇の穴」俺はランカシャーレスリングのマイスターにもてあそばれているようだ。

それでも簡単には負けられない。

何とかスタンドの打撃戦に持ち込もうと、ロープエスケープから一度場外に出て一息入れた。

相手はリング内でここから入って来いとトップロープとセカンドロープを開いている。

リングに戻り間合いを取って睨み合う。

右へのフエイントからの飛び後ろ回し蹴り。

綺麗に決まった。

俺も初体験の関節技に面食らう試合展開だが、相手も俺の出す技は見たことがないものが多いようだ。

それは観客の反応からも間違い。

反動を利用するのは難しそうなロープだが、俺は数歩後ずさりすると、立ち上がった相手の顔面にフライング・フォアアーム。

体が勝手に反応し始めた。

この感覚は以前にもあった感覚だ。

誰かが俺に乗り移ったかのように、使った事もないような技を繰り出し始める。

追い風が吹き始めたようだ。

自分が何を始めるか分からないけど、楽しみでワクワクする。

うつ伏せにダウンした相手に馬乗りになって肩の関節を極めている。

俺の膝が支点になり相手の手首が力点で方が作用点。

理に適った関節技だ。

肩から頸椎、背骨にまで負担をかけるように、流れる様に相手の体をコントロールしていく。

今度は向こうがロープに逃げる番だ。

クリーン・ブレイクの後、スタンドのままヘッドロックに捉えた。

次の瞬間足元をすくわれたような感覚で、下半身が宙に浮いた。

まるでスローモーションのようにゆっくり体が浮き上がったかと思うと、そのまま上昇し続ける。

驚いたことに左腕一本ですくい上げられているだけだ。

絶妙のタイミングで重心を移動させなければ出来ない芸当だ。

上死点に到達したのが分かったと思ったら、一気に下降をはじめ

俺の背骨は相手の膝に叩きつけられて粉碎した。

悲鳴も出ない。硬いマットが恋しいくらいだった。

死に体の俺にダブルアーム・スープレックス。

完膚なきまでに叩きのめされた。

完敗だ。

本物のレスラーに手厳しい稽古をつけてもらったってことか。

来客

あ痛たたた。

つま先に痛みを感じて眼が覚めた。

誰かが俺のつま先を曲がらない方に向けて曲げようとしている。

どうやら寝たきりの俺の筋肉をほぐしてくれているらしい。

いつものことらしいのだが、こんな痛みで眼が覚めたのは初めてだ。下手な関節技よりも痛いぞ。

暫く体中を捏ね繰り回された。

ようやく解放されて落ち着いた頃にお袋が誰かと一緒にやって来た。妹のケーコと幼馴染のあっちゃんがいるようだ。

エレベーターホールで偶然会ったらしい。

あっちゃんが来てくれたという事は今日は火曜日か。

この前眼が覚めたのは土曜日だったような気がする。立て続けに長い夢を見ていたからなあ。

お袋は俺と交代でアメリカに行く予定だったのに悪い事したと思う。

親父も向こうでの仕事も軌道に乗ってようやく長年の夢だった牧場を手に入れたのに、俺がこんなじゃお袋が日本を離れない。

二人とも楽しみにしていたのを知っているだけに親不孝だな。

ケーコはまだ学生で、バレーボールでオリンピック目指してる。

小さい頃から俺について空手やったり、バイク乗り回したりする元気な奴だった。

あつちゃんは幼稚園から高校まで一緒に十回以上クラスメイトになった友達だ。

今は親父さんの店を手伝いながら漫画家目指してる。

真っ直ぐな線や丸を定規を使わなくても書ける俺には信じられない能力の持ち主だ。

起きたいよな。

中身の俺はこんなに元気でプロレスやってるのに。

ヒールサイド

今夜の俺は忍者の出で立ちだ。
好んでしている格好でもないが、見慣れないリングや対戦相手が出てくるよりは気が休まる。

自らのコーナーを数歩前に出て相手を睨む。
目の前に黒人のレスラーが立っている。
敵のコーナーには奴のパートナーの他に赤鬼とタトゥーがいる。
俺の後ろにはケビンだけじゃなく、筋肉の塊が二人立っている。

次の日曜は月に一度の特番だ。
今日はその対決を煽るマッチメイクが組まれたということか。

シングルマッチではないので、ロックアップすることもなくお互いロープに走る。
敵は一番動ける奴を先発させたようだ。
こちら俺が一番動けるってことか。

負けてはいられないが、スピードは向こうが上だ。
しかし瞬発力なら俺に分がある。
交錯する瞬間にクロスライン。
ダウンを奪うがすぐ立ち上がってくる。
それならばとドロップキック。

しかし敵も然る者、エプロンにエスケープしたかと思いきや、スワンダイブのニールキックが降って来た。
楽しいねえ。

力量に差の無い奴とガンガンやるのはレスラー冥利に尽きる。

一通り動いて見せた後、ケビンにタッチした。
向こうも相棒と交代だ。

ロックアップからオーソドックスなレスリングの流れを披露している。

暫く首や腕の取り合いの展開があった後、レフェリーのブラインドを突いてケビンがサミング。
と言うことはこちらの四人がヒールサイドなんだ。

そこから敵軍で一番攻略しやすいそうなケビンの対戦相手を自軍コーナーに引きずりこんで一頻りいたぶる事になる。
助けにリングインしようとするパートナーや赤鬼はレフェリーがインターセプトしてくれる。
徐々に盛り上がってくる。

金髪筋肉と黒髪筋肉のサンドイッチ攻撃をかわした男が自軍に転がり込みざま赤鬼にタッチ。

勢いよくリングインした赤鬼は二人の筋肉男をクロスラインで吹っ飛ばす。

俺とケビンも吸い込まれるようにリングに入って、やはりクロスライン被弾。

リング上では赤鬼が仁王立ちで見得を切る。
場内大声援だ。

場外では対戦権のある金髪筋肉がタトゥーに捕まり、強制的にリングに戻る。
攻守交替ここから暫く敵陣での試合が続く。

黒人アスリートの空中殺法をすんでのところでかわした金髪が這

う這うの体で戻ってきた。

ケビンが勢いよく出て行ったが、向こうは真打登場。
タッチを受けたタトゥーが入ってきた。

そろそろ試合の決まる時間帯が近づいている。

特番前の対戦だ。ここで負けた方が本番で勝つ法則。

一気に終焉を迎える試合展開に場内はかなりのヒートアップだ。

挑戦権

今夜はテレビでプロレスがある日だ。

先週のおかしなプロレス中継の話をケビンにしてみたが、まともに取り合わないので奴の家に押しかけて一緒に見ることにした。他にもプロレスが好きな仲間が何人が集まっている。

先週の放送を観た連中は確かに俺とケビンがテレビに出て試合をしていたと言っている。

俺が夢を見ていたわけではなさそうだが、どちらかと言うと夢であって欲しかったと言えなくも無い。

何試合かの決着がつき、いよいよセミファイナルで俺とケビンがバイクに乗って入場してきた。

この頃にはもうそれなりにみんなアルコールの充填も十分でワイワイしながら見ていた。

俺のバイクはなんでゼロ戦なのか、皆が質の悪い蘊蓄を述べやがる。

生中継の放送で試合をしているプロレスラーをその本人がテレビを通して観ている。

今度の日曜に向けての煽りの八人タッグマッチだ。

俺とケビンが一番若手の下っ端で、ボディビル上がりの筋肉マンコンビとチームを組んで、アマレスで実績のある二人組みと超大型の怪奇派ベテランコンビのチームと戦っている。

試合では全員が得意技を披露し特番へ向けてのアピールと因縁作りを繰り返している。

最後はベテラン組の大御所にケビンがやられて試合が終わったが、

その後も全員入り乱れて乱闘が続いている。
味方チームで闘ったとは言え特番では敵同士ってことで、四チームが組んず解れつだ。

事態を収束するためにGMと思しき人物が現れた。

いかにも業界長そうな紳士が険しい表情でリングに向かってい

GMがリングに上がった頃には、一頻り暴れたレスラー達が四つのコーナーにそれぞれ陣取ってセキュリティの連中に宥められていた。

今度の特番では四チームによるイリミネーションマッチで闘うことになった。

それぞれのコーナーにタッチロープを設け同時にリングに入って闘うのは二人だが、誰とタッチしても良い。

負けた選手とそのパートナーは失格。

最後に残ったチームがタイトル挑戦権を得る。

ちよつと待て。

これだけ面倒くさい展開で勝っても挑戦権って。
じゃあ誰がタッグチャンピオンなんだ。

毎週見ているはずの番組なのに先週から展開が支離滅裂だぞ。

縁起の良い初夢

メインイベントがもう一試合残っていたが、集まっている連中は誰一人黙っちゃいない。

ここにいる仲間内の二人が生放送でプロレスしてるんだ。

ネットで調べる奴もいれば、今夜の試合会場の近くに住む知り合いに電話する奴。

アルコールも手伝っているのかパラルワールド説をぶち上げる奴もいる。

誰かがタイムマシンを間違った使い方してこんな事になっ手しまったそう。

とりあえず分かったことは、ここ数ヶ月で彗星のごとく現れた大型ルーキーがケビンで、俺は初登場から一月経っていないらしい。しかしこれだけプロレス好きが集まっているのに、その過程を知ってるのが一人もいない。

ケビンは初登場で大型怪奇派の大物から要領良く勝利を掠め取り、その後中堅どころ相手に圧勝を続け格を上げたところで先方から絡んできてくれたってな流れだ。

大型怪奇派二人に絞められそうなケビンを助けに出てきたのが俺。

デビュー戦でいきなり稲妻に撃たれた俺は暫く姿を消し、先週の放送が始めての試合だったようだ。

それにしても忍者の格好と言い、ゼロ戦色に日の丸付のバイクと言い、設定に俺の意思がまったく反映されていないと思われる。

リングネームに至っては、『タカ・フジ』こんな縁起の良い初夢みたいな名前誰が考えやがった。

『ケビン・ムーア』は本名だし奴がリングに乗り付けるのは、そこ

のガレージに停めてあるバイクなのに。

もう一人の当事者のケ빈は、基本能天気な男だからこのことをあまり深く考えていないようだ。

しかし合点がいけないのはみんなと同じで、どうせならテレビに出てる偽者ぶつ飛ばして俺達が出ようぜってなところ。

この際ケ빈と二人で試合会場に押しかける算段を始めたら皆が乗ってきた。

特番の前にハウスショーがフェニックスに来るようだし、そこに押しかけることになった。

道草

今夜はフェニックスでハウスショーだ。

特番前の予行練習も兼ねて、俺達のコンビは因縁のある怪奇派大型チームと対戦することになっている。

因縁作りや煽りよりも最終調整の意味合いが強い試合になる。

テレビ中継が無いので派手な演出は無いが、きっちり段取り踏まないとまたブツカーの親父が雷を落としかる。

それに今日の対戦相手からも、いくつかアドバイスを貰っている。しっかり修正してここまで面倒見てくれた先輩に恩返ししなくちゃな。

とは言つものの、地元にも近い昔の仲間もやってくる。ショーが終わってから忙しいうことになりそうだ。

俺とケ빈はレンタカーを交互に運転しながら会場に向かった。朝早くから走ってるから、時間にはかなり余裕が出来た。まあ道草喰う予定があるからなんだが。

クォーツサイドの街外れにある昔よく通った店に入った。

いつもの席で軽い食事を摂る。

脂肪を付けるわけに行かない仕事なもので、昔のようにガツガツいけないのが残念だ。

ここで仲間達と合流する予定なんだ。

変な奴ら

ケビンと二人でここ数ヶ月のまとめをしていた。

どうもこのひと月、俺の記憶がかなり飛び飛びになっている。

現実を受け入れるが、何でこうなっているのかがどうにも思い出せない。

話をしながらのんびりしていると、聞き覚えのあるバイクの音が聞こえてきた。

ハーレーにドカティ、ホンダにビモータ、モトグッチまでいる。

ジェリー、エディ、ルーク、ビリー、デビッド、ケリー、マイク、皆相変わらずのようだ。

店の前にバイクを乗りつけるとにぎやかな連中がなだれ込んできた。

最年長のジェリーはV型エンジンってのは正面から見てなんぼだともトグッチに乗り続けている変な奴。

エディは一番強いのはホンダの造るバイクなんだと言い張る変な奴。ルークはビモータこそが究極のマシンでそれ以外は考えられないらしい変な奴。

ビリーはドカティでダートのレース走る変な奴。

デビッドとケリーはスポスタ改造してレプリカマシン追い回すのが趣味だつて言う変な兄弟。

マイクはバイク屋の倅でいつも違うバイクに乗って来る変な奴。今日は隼で登場だ。

変な奴らばかりの集まりだが、ちゃんと働いて税金払ってる善良な市民ばかりなのが俺達の取り柄。

思い切った商売やりだしたのは俺とケビンくらいだ。

そもそもバイク乗りやプロレス好きなんてのは基本的に変な奴だとは思うが。

久しぶりに全員揃った色気の無い集団は、それぞれが勝手に言いたいことを言っている。

結論なんか無い話を繰り返していたときだった。

十台くらいのバイクの集団が店に近づいてきた。

いつもの店

今夜は仲間達が集まって皆でプロレス観に行くことで、仕事を午前中で切り上げた。

集合場所のケビンの家に行くとそこにはすでに2台のスポスタと隼が停まっていた。

デビッドとケリーの兄弟と、見慣れない隼はきつとマイクだろう。この三人は特にケビンと中の良かった連中で、この前の俺とケビンが出て来る生中継も一緒に観ていたメンバーだ。

デビッドは2メートルを超える長身、牛や馬相手に人間と同じように話する。

その弟のケリーは陸上十種の州記録の持ち主、草や花の気持ちが分かるらしい。

マイクは父親のバイク屋を手伝うようになってから、業績を一気に上げたビジネスマンだ。

並べてバイクを止め家に入ると、四人はコーヒーを飲みながら駄弁っていた。

俺もコーヒーブレイクに仲間入りしようと歩み寄った時に排気音が聞こえてきた。

ジェリーのモトグツチだ。

大学で教鞭をとるネイティブアメリカンのジェリーは俺達の良き兄貴分でもある。

続いてエディとルークのアフリカ系コンビが到着。

エディは父親の仕事の関係で日本で生まれた後、世界中あちこち転々としたから地球人なら誰とでも会話が出来る特技を身に付けたSEだ。

ルークは大道具の仕事をしているから、材木と塗料があれば大概の物は創つちまう神様みたいな奴。

最後にビリーがやって来た。いつもそうなんだ。皆が揃うのをどこかで見てたかのように最後にやって来る。

いつも冷静沈着な弁護士でスーツかライディングウェアしか持っていないと言う噂がある。

全員揃った。

せっかくだから少し流そうぜって話になり、いつもの店に向かってエンジンに火を入れた。

先客

イーグルマウンテンでちょいと道草喰ってからたまり場に向かった。

思っていたよりも早く店に着くことになりそうだが、先頭を走るケビンがペースを落とさない。

言わんこつちや無い、おかしいな集団が前に見えてきた。

かなりの台数のバイクが大音響撒き散らしてる。

走ってるとは言えないようなスピードだ。

何処で手に入れてきたのか分からないが、程度の良さそうなバイクがないぞ。

見方によつてはビンテージなのか？

とりあえずやかましいから何とかしたいのだが、台数が多いから全部抜くのはかなり手間が掛かりそうだ。

一緒に走っていて仲間だと思われたくないような気もするし・・・

どうでもいいことであれこれ考えてるとケビンが行った。
そうなると続かざるを得んよなあ

何十台ものクラシカルな爆音集団を抜いて行く。

まるでパレードの序列を乱すようだったまれないが、ペースが違いすぎるんだから仕方が無い。

ようやく連中を追い向き、その姿が見えなくなった頃に店の看板が見えてきた。

店の前には先客がいるようで何台かバイクが止まっている。

同じバイク

店に着いたらコーヒで一息つくこうと思っていたのだが、不思議なことが起こり始めた様だ。

バイクはちゃんと走っているのに、一向に店が近づいてこない。アクセルは開けている。

スピードメーターも進んでいることを伝えてくる。

何か得体の知れない力が働いて、俺達を店に近づけまいとしているようだ。

ほかの仲間達もこのおかしい感覚を味わっているのだろうか。

少しずつ店に近づいているような気はするが、まだ先客のバイクが何か判別できない。

しかし、大体の見当はついてきた。

俺の嫌な予感『予言』に等しい。

まず間違いなくあれは俺達のバイクだ。

そうなると俺とケビンだけではなく仲間達も自分と対面することになるのか。

自分のことだけでも面倒臭いのにはケビンがもう一人いて鬱陶しさ倍増で、これに後七人も出てきた日にはもう対処しきれんぞ。

しかし何だ。もう一組の俺達は俺達のこと知ってんのかなあ。

どのタイミングから俺達は二組になってしまったんだろう。

いや待てよ。この分だともしかすると、まだまだ色んな所にいっぱい存在してるのかもしれないぞ。

それとも奴らは未来とか過去から来たんだろうか。

過去から来たなら今の俺はそれをもう経験済みで知ってるはずだか

らそれは無いか。

うん。取り留め無さ過ぎだ。

これ以上考えても仕方ないと脳味噌が認識した頃、店の前のバイクが確認できるようになった。

七台停まっている。

俺とケビンのバイクが見当たらない。

先頭に行くケビンが店の前に着いた。

先客たちのバイクに並べて停める。

バイクを降り顔を見合わせる。

皆大体同じことを考えているようだ。

少しばかり意を決して入り口に向かって歩き始めた時、店の扉が開いた。

近づいてくるバイク

仲間達と話しながら窓の外に眼をやると、バイクの集団が砂煙を巻き上げながらこちらに近づいてくるのが見えた。

十台くらいの集団だと分かるまで、それほど時間は掛からなかった。仲間達もそれに気づいたようで、話しながらも時折視線はそちらを向く。

だがバイクが判別できそうなところまで後少しというところで、動きがおかしくなった。

前にも何度か経験した感覚だ。

時間の流れが急にスローダウンしたようで、砂煙を上げこちらを向いて前進しているはずのバイクが一向に近づいてこない。

タトウーや赤鬼と対峙した時や必死で逃げていた時の事を思い出した。

この感覚がやってくると、その後必ず予想も出来ない事実には翻弄されることになる。

暫く時間が流れた後

「ん？なんだありや・・・」ルークが声を上げた。

ゆつたりと時間をかけて近づくバイクだが、ようやく眼の良いルークにはそれが何か分かったようだ。

程なく俺達にもそのおかしい状況が判別できるようになった。

こちらに向かってくる連中は俺達と同じバイクに乗っている。

先頭のビューエルはケビンのバイクだし俺のZXも走っている。デビットも含めライダーの背格好も俺達のようなのだ。

またケビンが何かおかしな仕掛けをしやがったかと顔色窺ってたが、奴も固まってやがる。

ジェリーが立ち上がり、ビリーに目配せをした。

他のメンバーには座ってる声をかけ二人で店の入り口に向かった。

張り詰めた空気

店の扉が開くと、そこにはジェリーが立っていた。

少しだけ片方の眉を吊り上げ、怪訝そうな表情に薄い笑みを浮かべ立ち止まった。

一度足元を見つめて息を整えたのかゆっくりとこちらに向かって歩き始めた。

すぐ後にビリーの姿が見える。

こちらのジェリーが息を呑むのが分かった。

「よお兄弟」こういう時に空気を読まずに何かやらかすのはケビンと相場が決まっている。

考える前に体が勝手に動く野郎だ。

こちらのビリーがケビンを制止するかのように出で、ジェリーと共にもう一人の自分達に向かって歩を進め始めた。

信心深いデビッドが小さく十字を切っている。

ガシャーン クワーン、クワーン、クワーン

間の抜けた子供向けアニメの効果音のような音が響き渡った。

ステラが薄いステンレススチールのトレイを床に落としたようだ。

場違いな音を立ててしまったことを恥じ入るかのように落ち着く先を求めてくるくる回っている。

少なくともケビンよりは空気の読めるトレイだ。

ステラはこの店のオーナー兼シェフのジョンのおかみさん。

口喧しいが面倒見の良い肝っ玉の据わった文字通り大きな女性だ。

しかも結構美人だし。

ただこの場面では少し後ろに下がっていて欲しい。

この期に及んでもし彼女が二人になっちまったら世界征服も夢じゃ

ないような怖いおばちゃんなんだ。

二組のジェリーとビリーの距離が縮まっていく。
さすがのケビンも大人しくその様子を追っている。

俺達だけでなく、店内の空気も張り詰めているのが手に取るようにわかる。

爆音集団

両軍とも信頼のおけるリーダーと名参謀がお互い手探り状態で何か話し始めた。

二人のジェリーが同じように片方の眉を上げている。

ビリーは伏目がちに会話を分析しながら吸収している。

好奇心を抑えきれない俺はバイクを見ているふりをして、少し距離を詰めて会話が聞き取れるところまで位置を変えた。

二台並んだ同じバイクはどちらも左チェンジだから、どこかで読んだことのある左右対称の世界に迷い込んだわけではなさそうだ。

「お互い同一人物のようですね」「いつ何処から来たのですか」

「いつの間に二人になっちゃったんだろう」

そんな言葉が聞き取れたが、どっちのジェリーが言ってるのか判別できやしない。

店の方に目をやると、扉の向こうにケビンの姿が見えた。

バイクは見当たらないが奴もいるのか。

つてことは、もう一人の俺も店の中で聞き耳立ててるんだろう。

成り行きを見守っていると、後ろのほうから喧しいエンジン音が押し寄せてきた。

さっき抜いた連中が近づいて来ている。

お願いだからそのまま通り過ぎてくれ。

これ以上話をややこしくしないで欲しい。

そんな風に思った時は、ほぼ必ずややこしくなる方向に風は吹くもんだ。

案の定、喧しい連中が減速を始めた。

そんなにエンジンブレーキが使いたいのか。

ダブルクラッチだの空吹かしだの、奴らの燃費は距離じゃなく音量を分母に計算が成り立ちそうだぞ。

集団の先頭がバイクを止め始めた。

後続がうじゃうじゃやって来る。

最初にバイクを停めた連中がこっちに向かって歩いてくる。サングラスで表情は掴めないが、妙に肩で風切ってやがる。

こっちは俺とケビンの担当だな。

目配せするとケビンも同意したようで、二人して爆音集団に向かった。

合わせて十八人

ケビンと二人で、バイクを停めてからもなかなかエンジンを切らない騒々しい連中に向かう。
向こうからも何人かこちらに向かってくる。

じれったい・・・
時間の流れが緩やか過ぎる。

相手は四、五十人はいるぞ。
揉めちまった面倒臭いことになる。
まあこつちも考え方によっちゃ合わせて十八人だし何とかなるかいざとなったらステラも加勢してくれるだろうし。
でも奴らの分まで複製が登場したら、もうどうにもならない。
時間があまりに緩やかなんで、くだらない事を考える時間があり過ぎる。

「よお」ケビンが能天気にな声をかけた。
先頭で肩で風を切ってた男がサングラスを外した。
草食動物のような目をしている。
威圧感の無さにちよつと拍子抜けした。
それにどう見ても俺達より年上で、人のよさそうなおっさんだ。

ケビンの挨拶に軽く応えた男の視線がふと俺達を通り過ぎて後方に送られたのがわかった。
何か言うタイミングを失った俺はその視線を追って振り向いた。
そこに見えたのは店の入り口でこちらを見ている俺とケビンだった。

サングラスを外した男が俺達に声をかけてきた。

店のほうを指差し「よお あそこにいるの プロレスラーのケビンとタカだよな」

「へ？」

じゃあ目の前にいる俺とケビンは奴等の目にどう映ってるんだ。

新しい客

店の中ではステラがそばにいたマイクを捕まえて説教を始めた。

「あんたたち 悪ふざけもほどほどにしな なんのつもりさ 仕掛けを教えなさい」

そんなもん誰にも説明できやしない。

そうこうしているうちにかなりの台数のバイクが近づいて来た。

排気音が地響きを立てて押し寄せてくる。

今度は何だ。

これ以上俺たちが増えることが無いようにと切に願う。

暫くすると地響きは減速を始めた。

どうやらまだ一難去っていないうちにまた一波乱ありそうだ。

この頃になると、その音質やアクセルの開け具合からコピーが増えるわけでは無いのがわかった。

それだけに一まとめで問題に対応できない。

ジェリーとビリーとジェリーとビリーの会話はまだ始まったばかり。

表の様子を見てみると、俺とビリーが集団に向かって歩いて行く。

服装は違うが自分達を見間違うはずも無い。

それにあれ持つてる服だし。

向こうからも五人ばかりがこちらに向かってくる。

先ずケビンが声をかけたようだ。

向こうも先頭を歩いていた男がサングラスを外し何か受け答えしている。

サングラスを外した男が、こちらに向かって何か言った様だ。

俺が振り向いてこちらを見た。

入り口に立って様子を見ていた俺は、生まれて初めて自分と視線を合わせた。

なんともいえない感覚だ。

それは向こうの俺も同じだろう。

ここまでは揉め事にはならず、話が進んでいるようだ。

俺とケビンが新しい客を連れてこちらに向かって歩いてくる。

プロレスラーとバイク野郎

自分自身の姿を見つけた俺は一度視線を外してから、もう一度ゆっくり店の入り口に視線を戻した。

そこにいるのは間違いなく俺とケビンだ。

実物とこんなかたちで遭遇することを想定していなかった俺は眼を逸らす事も出来ず固まってしまった。

他の連中からマックスと呼ばれるサングラスを外した男が「行くぜ」と声をかけた。

この男の中では、すでに俺もケビンも仲間内になっているようだ。かなりプロレス好きのようで、店の入り口に姿を現したケビンとタカに眼を輝かしている。

まだ押し寄せてくる爆音集団の後続のことなどもうどうでも良くて早くプロレスラーと話がしたいようだ。

しかし何故あそこにいる俺がプロレスラーと認識されて、ここにいる俺はただのバイク野郎と認識されるのだろう。

デビッドやケリーは生放送のテレビ中継でプロレスするもう一人の俺やケビンを見てすぐに種明かしを求めたのに。

マックスに声をかけられて我に返った。

もう一人の自分と話したいと言う欲求に抗うことは出来ない。

それはケビンも同じようで俺達二人は爆音集団の連中を率いるように店に向かって歩き始めた。

二組のジェリーとビリーのそばまで来ると、好奇心を押さえ込むのがつらくなっていた仲間達は俺達と一緒に店に向かって歩き始めた。

爆音集団の後続の連中はまだ全員到着していない。

すでにバイクを停めた者も、まだエンジンの音を楽しみながら与太話でもしているのだろう。

マックス達五人以外はまだバイクのそばを離れようとしない。

俺を含めて九人の仲間と、二人目のジェリーとビリー、それにマックス等五人はそれぞれの理由を持って店に向かう。

両手は腰。脚は肩幅。

ジェリーとビリーがもう一組の俺達と一緒に店に戻ってきた。

余計な連中までくっついて来やがったと思っていたのだが、奴等のおかげでまたひとつおかしな事実が判明した。

俺たち二組はそれぞれ互いにもう一組の自分達を認識している。ジョンやステラもドッキリカメラを疑いつつも、いつもの客が二組になってしまったことを認識している。

ところが招かれざる客のマックス達はプロレスラーのタカ・フジとケビン・ムーアは認識していて、サインをよこせだの腕相撲しようだの面倒臭いことこの上ないが、後から来たもう一人の俺達のこととはただの一般人と思っている。

同じ人間が二組で十八人も雁首揃えているのに、似ていると言う感覚すらないようだ。

少しだけファンサービスしてちよつと打ち合わせだとか何とか言つて、マックス達には表に出てもらうことにした。

五十台くらいいると思っていた連中の仲間は、そんなもんじゃなくていまだに次々押し寄せてくる。

到底店に入りきれないから、駐車場で一休みして次の目的地に向かつてもらおう。

マックスはじめ有志一同は、今夜のハウスショーに来てくれるらしい。

そこでサービスするからつてことで、ここは引き取ってくれた。

やっと落ち着いて話が出る。

何から話そうかと思つた時に、今度はステラの咳払いが聞こえた。

両手は腰。脚は肩幅。お腹を凹め、胸を突き出してこちらを見下ろしている。

ヤバイ時のポーズだ。

と思ったときには既に遅く、ステラの口撃が始まった。

ジヨンはそそくさと厨房に消えた。流石に逃げ足が速い。

有無を言わせぬ口調で自分を騙して楽しんでいる俺達に向かって説教が続く。

俺達にあんたを騙そうなんて度胸の持ち主がいるわけがないぞ。

ちよつとだけでいいから俺達が話し合いするの静かに聞いててくれ。物凄い努力と時間を労費して、やっと九対九で話が始まった。

ミーティング

不思議な話としか言いようが無い。

目の前に俺がいる。

それも偽者って訳でもないんだ。

奴は自分こそ本物だと思ってるし。

先週まではテレビの中でしかお目に掛からなかったから、それが生中継だと分かっているにも、まだ何かからくりがあるんじゃないか、いやあるに違いないと自分に言い聞かせてきたが、いざ目の前に俺がもう一人いるとなるとなかなか迅速な対応なんてものは出来やしないぞ。

そして隣にはケビンが二人いる。

それだけでも十分なのに、七人の仲間まで倍になっちゃった。

話を聞いてみると、こっち側の俺とケビン以外の連中は、先週のテレビ中継の後、今日ケビンの家に集合が決定した。

向こうの七人は今日のハウスショーが決まった時点で、この店で待ち合わせが決まっていたらしい。

その間の行動パターンは、俺とケビンに関わりの無い部分では驚くほどに一致している。

どっちの組のメンバーも今朝の朝食まで同じ物食ってきたらしい。

ってことは、どうやら俺とケビンが二人になったのより、かなり後から分裂したみたいだ。

何で俺とケビンだけじゃなくて他の連中まで二人になってしまったんだらう。

他にも二人になっちゃったのがいてのおかしくないよなあ。しかも人間だけじゃなくて、バイクまで二台に分裂している。

それに爆音集団のマックスの目には、俺達が7×2ではなく14に見えていたことも不思議でならない。

俺達が増殖したという事実は、当事者だけでなくジョンやステラまでもが認めるところだ。

二人もジェリーがいるから、事の解析はかなりのスピードで進んでいるだろう。

何か納得できるような理由が欲しい。

ケビンのお馬鹿みたいに、この短時間でもう一人の自分を「兄弟」と呼んでずっと一緒にやってきたかのようになっちまうのも手かも知れないが。

一先ず試合があるプロレスラーの方の俺とケビンは、一足先にフエニックスに向かうことになった。

残された十二人はこれからみっちりミーティングだミーティング。

能天氣の権化

今夜の試合会場に向けて車を走らせている。

助手席では能天氣の権化のような野郎が爆睡してやがる。

ようやく静かな空間で少し考え事が出来そうだ。

自分の記憶に空白があるので、もう一人の自分と話をしているうちに、もしかすると奴が実像で俺が虚像のような気になった。

ここ暫くのプロレスラー生活にしても、なんとなく楽しんでこなしているもののスタートした時の記憶が無い。

数ヶ月前日本へ帰った頃から、ケビンとプロレスラーとしてやり始めたあたりの記憶の欠如を、もう一人の俺と話した時にぶつけてみた。

奴はそのあたりの記憶も途切れておらず、こちらに戻ってからも相変わらず親父に振り回されて仕事に明け暮れる毎日を過ごしているそうだ。

となると、そのあたりで俺は二人になってしまったという事になる。

じゃあケビンはどうなんだろう。

こちらの俺は奴に翻弄されっぱなしだが、向こうの俺は以前と変わらず馬鹿やる仲間として『良好な関係』を保っているようだ。その仲間達に至っては、つい最近分裂を起こしたみたいだし。

まとまらない考えに少し苛立ちを覚え始めた頃、道路の脇に群がるバイクの集団が目に入ってきた。

マックス達だ。もう出て来んなよな。

見る度に台数が増えて百台や二百台ではきかない台数に膨れ上がった。

て、ガソリンスタンドを埋め尽くしてやがる。
ここからでも喧しくて仕方ない。

そう言や、どうしてマックスは二人の俺を区別できたんだろう。
そこに何かのヒントがあるような気はする。
物凄く気にはなる。

しかし少なくとも今、これ以上奴らと関わるのはごめんだ。

素知らぬ顔でやり過ごせますように。

何日分もの夢

よく眠れた。

随分長い間眠り続けたような気がした。

しかし、目覚めてから情報が入力されてみると、実際のところ一晩ぐっすり眠っただけのようだ。

何日分も夢を見ていたような気がする。

プロレスラーの俺とバイク乗りの俺、自分が自分に乗り移っても
う一人の自分と向き合っていた。

目覚めてみるとなんだかおかしい感覚だ。

目の前にいるのも間違はなく俺なのに、考えていることが読めなかった。

奴らは俺の存在に気がついていないが、俺は二人を知っているし、
どちらにも乗り移って奴ら自身になったことがある。

身動きは出来ない状態だが、奴らに対して少しばかりの優越感を持っている。

バイク乗りの俺は数ヶ月前の俺自身で、こうして寝たきりになっ
てなければあんな風だったんだろうなあ。

今より少し髪が長くなっていた。

プロレスラーの俺は少し未来の俺なのかも知れない。

俺の知らないはずの事が、奴に乗り移ったときに沁みこんできた。
それに最近見た白黒の夢や、フッカーに負けた試合で得た情報も奴
には既にインプットされていた。

もしかすると、奴の中にある記憶の空白が今の俺なのかもしれない。

だとすると、ここで横たわっている俺はそのうち目覚めてプロレスラーになるってことか。

もしかすると今の俺が奴の夢なのか。

会場入り

そばにあるジムで一汗かいてから会場入りした。

スタッフはいるものの、まだ選手はほとんど会場入りしていない。ブッシュは受けているがまだグリーンボーイだという自覚はある。天狗になるにはまだ早い。

もう暫くは先輩方の機嫌を損なわないようにうまく世渡りしないとな。

ベテランのスタッフに睨まれちまうと、きつかけが貰えなかったり、音が途切れたり、照明がちらついたり、いろいろ不可抗力ってもんが起こっちゃう。

ロードエージェントのおっさん達が来る前にケビンとの打ち合わせだけでも片付けておこう。

しかし実のところ、今日はジムはパスしてゆっくりしてやるつもりだった。
あんなことがあったから、現実逃避した結果が会場一番乗りなわけ。

明日は一日オフだし、今夜騒いだ後はじっくり真相究明だ。
今夜はもう一組の俺たちとも合流することになるのだろうか。
出来ることなら馬鹿騒ぎよりも、じっくり話がしたいような気がする。

冷静に考えれば当然か。

ここからは今夜の試合に集中しよう。

分裂

売り出し中のプロレスラーは試合に出かけた。

残された者達は重苦しい空気の中で時間を過ごすことを強いられる。

一人に戻った俺とケ빈は一息つける感じだが、残りのメンバーにとっちゃいい気はしないだろう。

それでもどちらが本物だともめることも無く、ことのほか冷静に皆この現象を分析しようとしている。

とは言うものの、目の前にいるといい気はしないが、存在を知っているながら分かれてしまうのも気持ちの悪いものではない。

自分自身がもう一人いるにもかかわらず、そうつが何処で何をしてるか分からないってのは嫌なもんだ。

何時何処で分裂してしまったのか。

何故マックス達には俺達が同一人物に見えなかったのだろうか。

この先ジョンやステラやマックス達も分裂するのだろうか。

親兄弟まで増えたら嫌だなあ。

税金はどっちが払うんだ。

疑問だらけだが答の予測もつかない。

そんな時ステラの一言に凍りついた。

「あんた達、もうこれ以上増えないでくれよ。」

確かにそうだ。

二人になったものが三人にならない理由は無idez。

それぞれが分裂したら四人になっちまう。

八人、十六人・・・

ぞつとする。

明日の朝、眼が覚めたら元に戻っていてくれないだろうか。
何とか元に戻る方法を見つけないければ。

それ以前に、これからこのメンバーでプロレス観戦に行つて大丈夫なんだろうか。

マックス達が気づかなかつたように、誰も俺達のことには気を留めなければ良いのだが。

しかし念のために二班に分かれて出発することにした。

試合後はまたこの店で合流だ。

ロードエージェント

プロレスラー抜きの七人が先発で会場に向かうことになり身支度を始めた時、店の入り口に一番近い駐車スペースにワゴン車が停まった。

くたびれたスーツ姿の中年男が二人車から降りてくる。

先発隊と入れ違いに店に入ってきた。

二人ともやけに体が分厚い。

一人は頭髪も薄くなり腹回りもかなりでっぷりとした親父で、もう一人は東洋系の整った顔立ちで白髪をオールバックにまとめている。

かなり長時間走り続けてきたようで、店に入るなり東洋系の親父は同じ人種の俺の方にチラリと視線をくれた後、トイレに直行した。でっぷりした親父は椅子に深く腰を落として「とりあえず、熱い珈琲をふたつ。」

カップに珈琲を注ぎながら、ステラが言った「今日はどちらまで？」

ちようと席につこうとしていた白髪の親父が「フェニックスで仕事なんだ。」

間髪いれずにケビンが「俺達もこれから向かうんだ。」

こんな時だけタイミングを外さない。

でっぷりした方が「そうか」

少しはにかんだような笑みを浮かべながら「表のバイクは兄ちゃん達のか、うちの若いのにも乗ってるのがある。気をつけるよ。」

「それにしてもお前さんたちみんないい体してるな。」

白髪の方が「何か運動してるのか」

即座にケビンが「アマレスとフットボール。」「州チャンピオンまでいったぜ。」

二人の親父はプロレスのロードエージェントだった。

これから今夜のフェニックスでの大会を仕切りに行くらしい。

で、まんまとケビンはスカウトされたということだ。

デビッドとケリーの兄弟、エディとルーク、それに俺にもお声が掛かった。

後日トライアウトを受けてみるってか。

俺とケビンはきっと受かるんだろっなあ。

アマレス上がりの二人組

ロードエージェントが遅れているので、今夜の最終打ち合わせが出来ないから、控えて屯している連中と情報交換だ。

皆良い先輩で、こちらからきちんとした質問をすれば大概のことは教えてくれる。

シヨービジネスとは言え体育会系であることに間違いない。

今夜は月に一度の特番を控えて、それに向けての煽りの意味合いが深い試合になる。

対戦相手は特番でも対戦するアマレス上がりのコンビだ。

二人ともかなりの身体能力を備えたアスリートで器用な選手だ。

プロでやってる期間が長い分インサイドワークも向こうに分がある。

体力では俺達の方が上だが、ジュニアの州チャンピオン程度のケビンと、練習したことはあるものの、アマレスでの実践経験の無い俺がまともにレスリングで立ち向かえる敵ではない。

突進力と打撃系の組み立てで対抗するしかないか。

控えの片隅で作戦を練っていると、ちょうどそこに今夜の対戦相手が到着した。

白人と黒人のコンビで、彼らもデビューから受けたプッシュを生かして何度もチャンピオンになった名コンビだ。

特に黒人の方は、陸上競技や球技でも素晴らしい成績を残した万能選手で、シングルでも戴冠経験もある大物だ。

普段は気さくな二人に何の躊躇も無くケビンが声をかけた。そこから四人で打ち合わせが始まる。

単細胞で計画性の無い野郎だが、こういう時には頼りになる相棒だ。

地元のケビンに花を持たせつつも、特番での結果を予想しいものにして楽しみにさせるよう煽るのが今夜のテーマ。

二人とも「受けてやるから派手に来い」と言ってくれる。

当然俺達も彼らの見せ場を忘れない。

話に熱が入り、いい感じで試合に対するモチベーションが高まってくる。

今夜は面白い試合が出来そうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8113v/>

横風に攫われて

2011年11月23日19時52分発行